

戦車第一師団防空隊 北支より南 支へ転戦

愛媛県 永見 清史

―召集部隊と、徴集年次、戦地は何処へ行かれま
したか。

私は大正六年三月二十日生れ、昭和十二年徴集兵で
すが、検査は第一乙種でした、当時は甲種だけが現役
でしたので、時期は一寸忘れたが、松山の連隊に教育
召集され、しばらくして解除になりました。その後は
四国電力に勤務し、ずっと後になり、昭和十七年九月
一日に再召集になりました。場所は福岡県甘木の高射
砲第四連隊補充隊第二中隊に入隊、一期の検閲が終わ
ると、十二月に小倉港を出発して満州第五九五部隊へ
転属ということになったのです。

部隊は牡丹江省にあつて、三ヵ月ぐらいの教育があ
り、そこで一等兵になったと思う。寧安という所だと

思うけれども、満州の各部隊から暗号や無線の集合教
育が一ヵ年ぐらいあつて原隊に復帰しました。

北支へ移つたが、戦車第一師団防空隊、車両無線で
指揮車に乗り命令を受けるといふ、機動部隊の一員と
なつたわけです。名称は戦車師団ですが戦車には乗ら
ぬ車両編成の防空隊で、戦車を守るための対空射撃が
任務でした。

―北支、中支、南支で作戦参加ということですが、
支那派遣軍は戦車第三師団の瀧部隊だけだと思つ
ていたところ、戦車第一師団の防空隊だけは満州の
本隊から離れて支那で戦闘したと知りました。作
戦経過などを話して下さい。

満州の牡丹江から北支へ行き、山西省の南方河南省
新郷付近及黄河鉄橋の警備をしていた。敵は日本軍の
南下を防ぐため黄河鉄橋を破壊するといわれていた。

黄河鉄橋南岸の霸王城攻撃で、河南作戦に入った、
昭和十九年四月頃か。この作戦では黄河河岸の戦闘で
戦死者が大部出た。なにしろ、敵は第一線を突破され、
日本軍が黄河を渡れば一挙に攻め上がるから必死な

わけだった。戦死者を火葬にするのが間に合わず、土饅頭を作って埋めた。なにしろ、黄塵万丈の嵐が吹いて、砂が大変だった。我々対空部隊では戦死者を野外で茶毘に付した記憶がある。敵機は、鉄橋を爆撃したり、我々高射砲陣地へも突っ込んで来る。

戦闘になると無線の通信は出来ないで、通信兵は穴を掘って蝟壺に入り伝令になる。砲は野原に壕を掘って据え付ける。砲と中隊長間の伝令を我々がやるわけで、高度・方向・信管何秒などと、中隊長の号令を、砲の小隊長に伝える。砲を射つと砂煙は立ち、敵の爆音や、爆弾の破裂音とか、機銃掃射などで、隊長の声は砲へ直接は聞こえない。また、砲と砲との間隔も相取つてないと、一発の爆弾で両方やられてしまう。

中隊の編成は、直径一二センチの高射砲一門に小隊長、中隊に二門、更に高射機関銃が二、三銃だったと記憶している。当時はもう制空権は日本軍になく、P51型の米戦闘機は自由自在に飛び攻撃してくる。爆弾は五〇キロぐらいのを、落すのだが直上の時は安心だが、向こうからこちら目がけての時は危ない。至近弾

を喰ったことも度々あった。破片が直接当たらなくとも土煙が跳ね返って怪我をする者もいた。また曳光弾で機銃掃射されると、弾道が判るのでドドドトとやられるのは精神的にもまいることがある。急に空襲されると逃げ場が無い、弾が直ぐそばへ来たことも多かった。

―河南作戦の後は南下したのですか、次の戦闘の様子を。

五月頃までは北支方面でしたが、中支へ入って、漢口、武昌と移動し、しばらく漢口付近で防空警備をしていました。湘桂作戦も始まって、衡陽攻略戦中だったようです。そのため武漢地区への空襲も段々激しくなっていました。衡陽陥落で第二次作戦、本格的な桂林・柳州攻略のため広西省へと入っていったわけです。全県付近にもいたのですが、戦闘の様子も地形も大分変わって来ました。

敵機は山陰から低空で陣地へ突っ込んで来る。戦闘といっても三分から五分ぐらいの間で、こちらも射つ、向こうも反転してはまた射ってくる。両方射ち合いますが、こちらの陣地は固定しているが、敵も命が惜し

いのだろうから、そう長時間はやっていない。

こちらが射って「命中」と叫んでも、敵機は遠方に行っているので、落ちたのか、逃げたのか判らぬことも多かった。直撃すれば良いが、敵機は速いから直撃はなかなかむずかしい。当っても残骸の確認が出来ないから、逃げ帰ったのが多いだろう。機関銃も中々当たらない。お互いに命がけの射ち合いですから、こちらも命がけだ。

県庁にある私の戦時名簿には、何処そこで何時戦闘したと書いてあるが、実際の戦闘と日時が違っている所もある。連隊本部は桂林、柳州へと進撃し、各地の戦闘に参加していたが、我々は全県付近に終戦の半年ぐらい前まで防空警備をしていたと記憶するが、細かい場所や日時は忘れてしまった。

その頃になると敵機は火焰爆弾を防空陣地へ落すようになつた。落すと瞬間に五十〜百メートルぐらい火が走る。ガソリンが入ったドラム缶みたいなものなのか、とにかく草原一面が火の海となる。

中隊は全県で、桂林の連隊本部と無線で連絡をとつ

ていた。防空中隊は百何十名ぐらいだったかと思うが、その中で無線は分隊長と私の二人だけ、私は暗号教育も受けていたので、作戦前になると連隊から乱数表を預かつて、それによって暗号文で無線を発信し、受信したらそれを文章にして隊長に報告する。

通信は無線の外に有線が二十人近くいた。これは整備班と陣地間を電線を布設して連絡する。車両部隊のため一カ所に長く駐留していないから、一般部隊、警備隊のように、敵や住民に切断された記憶はない。中隊と本部間は先に言ったように無線がやる。三号無線機なので大型だが移動の時は自動車に積むし、外へ出して発信する時は、中隊の使役がやるので、そう力仕事はせずと済む、無線・暗号は一種の技術者だし、機密情報や命令、人事もすべて無線と通じるので、別な立場にいたが、秘密保持、暗号書の保管など重大な責任を負わされていた。

―三号無線機だと、敵側の情報や、外国の電波も入つたと思いますが、全県駐留時は終戦近い時だったので、当時としては口外出来ない情報が入った

でしょう。

重慶放送が無線の波長を合わせると入って来た。浪曲や安来節など聞かせて「日本は段々負けておりますので亡んでいきます。抵抗しても無理です」とか、私はこれを聞いて不安になったが、上司の事務の准尉の人が、夜など室によんでくれて「日本はやられているので覚悟しなければいけない」など話をしてくれた。しかし、他の者には話すわけにもいかずにいた。

その頃になると、全県の上空を大型機（B 29型）が高度三千メートルぐらいで内地や満州方面へ行くのを見た。昆明から内地や満州への爆撃が盛んになってきたので、防空隊も監視をしていた。また全県にも三日か四日おきに空襲があった。P 51型機が偵察に来ると後から必ず、P 38（双葉）ロッキード機や、カーチスホークP 51が銃爆撃に来る。

敵もなかなか勇敢で、飛行士の顔がはっきり見えて、突っ込んで来たし、笑っているのもいた。編隊はたいいてい三機ぐらいだったが、偵察で高射砲陣地が大体判るので、我々を狙ってくる。先程いった火焰爆弾でや

られた陣地もあった。その頃、部隊本部は桂林・柳州地区を撤退し全県へと北上していたようです。

「終戦は全県で知ったのですか、復員まではどうでしたか。また家へ帰った時の様子などを話して下さい。」

終戦の日は暑かった。何か判らないが、八月十五日に陛下の放送があったのでおぼろげながら終戦と判った。また無線機を持っているので大体情報は判る。我々の部隊は自動車で直ぐに反転北上した。途中の守備隊に「もう戦争は終わった」と言ってもピンと来ないのか良く判断出来ない様子だった。本隊も直ぐに反転して来た。

岳州集結、武装解除前に我々は無線機を敵に取られないように池の中に捨てた。我々中隊だけはずっと固まって行動していて、私は指揮車に乗り、他の兵隊はトラックで高射砲を引っ張って来た。武装解除の時は、高射砲・車両など兵器類を中国軍に渡し、中隊には銃と剣を二挺程渡されたようだ。

終戦後、途中三、四日行軍したが、汽車には乗らな

かった。何処をどう歩いたのか記憶が薄れているが、岳州から九江地区へ行き、上海へ行くまで抑留生活というか自活をしていたようでした。

私も兵隊だから場所が何という所か判らないが行軍中、中国の子供が後から剣先で突つつくが、抵抗するわけにいかぬ。おどすと逃げるが、ワーワー騒いで投石するので始末におえない。戦後の行軍はつらかったし、食料も中国軍からの支給は少なく、自活といつても物を徴発するわけにいかないから苦労した。

北支から作戦に出て、桂林作戦に参加する時は、また帰って来るつもりで、車の中へ私物を入れ洞窟の中へ置いておいたが、負けるとは思わなかったので何ももっていないで集結したわけだ。服は夏服でほとんど裸同然。腹を空かせて、二十年の秋から翌年の五月まで何とか生き抜いてきたわけ。

上海までは徒歩と汽車ということだが、なかなか列車に乗せてくれない、汽車にようやく乗っても、時計や万年筆などを係や運転手にやらないと発車しない。停まったら物をやり、漸く上海へ着いたが、上海へは

各中隊、連隊本部などが集結出来、船は相当大きく、皆一緒の船で出港することが出来た。

鹿兒島に着いたのは、昭和二十一年六月二十六日頃だったと記憶している。港で裸にされ、DDTを掛けられ、持物全部を検査されたが、私は何も持って帰らなかった。

満州を出たのが昭和十八年、それから手紙は一本も来ない。部隊が移動、作戦の連続だから家族との連絡は出来なかった。連隊本部宛に、また通称号・満州第五九五部隊宛で随分出したという手紙は一本も私の所へ届かなかった。南支那に居るのに満州宛では来る筈はなかつたろう。

ようやく家に帰ったのだが、出征当時女の子が一人居た、三歳ぐらいで可愛い盛りだった。もう小学生になったかと、楽しみにして帰って来たのだが、私が帰る一カ月ぐらい前に病気で亡くなっていた。私は、そんなこととは全然知らなかった。折角帰って来たのに、それが今でも心残り、楽しみにして帰ってきたのに。それでも、妻も母も元氣だったのは幸せだった。

復員後、休職になっていた四国電力に復職した。全県で患ったマラリヤのため、帰ってから一年ぐらいは悪寒と高熱のため苦しんで、肝臓も悪くなった。連隊長の「羅患証明書」は今でも持っている。それが私の「戦いへ行った証拠」ということです。

中支で兵役免除、難病を克服して

広島県 村上秋義

―村上さんは何処で生れ、何年徴集兵ですか。また勤務地は大陸だそうですが。

私は大正七年十一月六日、因島で生れたのですが、昭和十三年徴集兵で、兵隊検査では甲種合格でした。昭和十四年五月一日、現役兵で福山の歩兵第四十一連隊補充隊へ入営しました。一期の教育の時から大隊砲(九二式)専門でした。

一期検閲後、第三十九師団(藤兵団)の歩兵第二三一連隊に転属し第三大隊要員となりました。八月四日

に編成が終わったと記憶しています。

昭和十四年十月九日、宇品港出発。十月十一日揚子江を遡行し、十九日に漢口に上陸しました。二十六日には漢口から孝感まで徒歩で行軍です。戦地だから戦争かと思ったら先ず行軍だったのです。

私の所属の第三大隊は後方の警備で、第一、第二大隊は孝感地域の最前線でしたので、第三大隊は宣撫工作や討伐の応援などに行ったのです。連隊本部は孝感にあった。

―戦地での教育訓練はどうでしたか。

訓練はなく、直ちに実戦だった。昼間は警備、住民の良民証の点検、夜は警備で歩哨に立った。歩哨は壕の中でないと狙撃されるので、耳と眼だけを出していた。情報では「歩哨が射られた」など時があった。

今言ったとおり、孝感では主要道路警備、宣撫などの連続で、休む暇もない。なにしろ戦争に来ているので、当たり前と思いきいとは思っていなかったが、楽しみは寝るだけだった。

冬期作戦に参加したが、雪の中の行軍で、野営は民